

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

90

「いつになく雪の多い冬であった」と、土地の人が語っていたこの冬、私は何度か裏山へ登った。家からの標高差はせいぜい百五十〜百六十メートルであろうか。しかし、二十センチほどの積雪のあった朝は、一足一足に難儀した。

山間の日の出は遅い。辺りは、白というより青暗い世界に静まり返っている。私の前には何の痕跡もない。すべては雪の下に、深い眠りにについている。

突然、視界を遮っていた雪の壁に目映いばかりの閃光が走った。閃光は瞬く間に大きな光の玉となって躍り出た。周囲は一気に輝きを放ち、色彩があふれ出す。光の中をしばらく進むと、微かに

水音が聞こえてきた。音の方へ近づくとわずかな窪地があり、周囲にいくつもの足跡らしき物があった。「そうか、ここへ水を求めに来たのだな」。鹿のそれは、私にもすぐに見分けられた。

だが、あとの丸いのや細長いのや四角っぽい跡ははっきりしない。主の分からぬもどかしさもこの時は楽しい想像の世界へと私を誘う。空想の翼をいっばいに広げ、一日中愉快な一人旅をしていったゆき日のように歩く。

山道は、カーブで景色を大きく変える。上りの重い足を引きずり、呼吸が荒くなってきた。大きなカーブを曲がりきった所で、全開の青空が広がった。空の下には雪山が

柔らかかな線で青色を切り取っている。

枯れ枝に真っ白な雪の花を咲かせた向こうの山に、伸ばせば手が届きそうだな。ただ「青」としか言えない、とびきりの青空だ。雪の白が痛いほどくっきりと存在する。どこからか雲も参集し、青い空に遊ぶ。

むことに決めた。正に、清流である。

そして、これも気仙川の源流とはいえないか。森林全体から流れ出た水は、一本の「雪沢」となっていて下り、数分先で気仙川へと入る。家主はこの水を自慢する。そして、この水を生かした生業をしきりに勧める。しかし

再生の地

陸前高田市矢作町 村田 邦子

今、私が住んでいるのは、五葉山系の裾野につながるのであらうか。植林の杉林と自然林が織りなす幾つもの小さい山々の谷間に流れる沢。その沢沿いの山里に暮らしている。

し、東京生まれ東京育ちの私達家族には、なかなか踏み切れない。その術もない。せめて清流を汚さぬよう、目下の所は合成洗剤を排除するくらいのことだろうか。

毎晩、鹿が来る。狸も狐も熊もいる。鶯の声に目覚め、降るような星空に眠る。家の周囲には、そこそこから水音が響く。この水に引かれて住

もそもも岩手に縁をいたいたしたのは、二〇〇六年十一月に息子と旅したことに始まる。二十歳で家を飛び出し、我が道をつつ走った息子が、ズタズタになって舞い戻っ

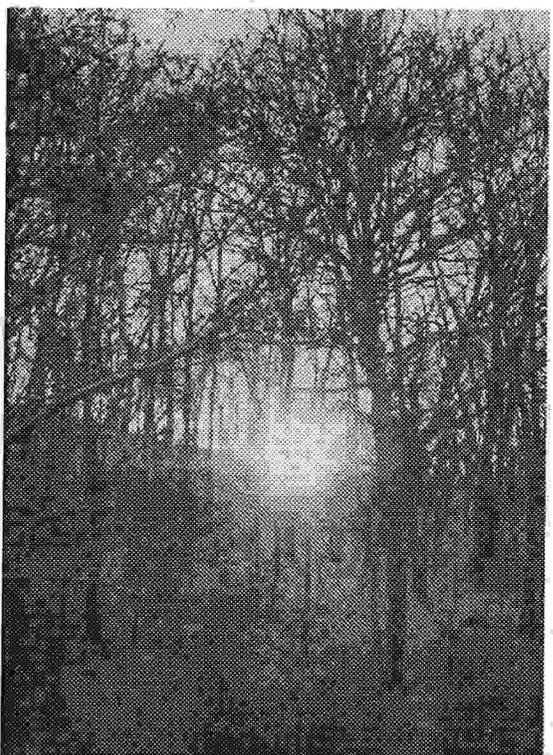
とばかりに飛び乗った。一人実家に暮らしていた母も「よいしょ」と乗せて、二〇〇八年春、陸前高田市に移住した。それから二年。息子はこの春、陸前高田市営農指導センターの研修を終了し、「農民」として歩み出した。たくさんのお陰様で支えられての出発だ。

目指すは、自然の力を最大限にたく農業、たという。林檎やベリー類の栽培・加工、無農薬有機野菜の契約配送、自生する山菜や山菜を増やしていきたいとも言った。



き、育み、与え続けてくれるこの地で、息子、十三歳の再生が始まっている。

【執筆者プロフィール】一九五一年生まれ。東京都で小学校教員を十五年。子育てに行き詰まって、信州で五年間「生き直し」の山暮らし。再び都会に戻って学校講師を経て、心の解放を目的とした「子どものアトリエ」を主宰。調剤師免許を取得し、「農家レストラン」を夢見る。金子みすゞの詩を読み合う高田みすゞの会「みすゞ亭」を主宰。山野草に魅せられて、訪ね歩きと水彩画をライブワークに。



樹姿を照らし出す太陽。新たな一日の営みが始まる＝矢作町雪沢の風景